



「あたしは按摩職人」

あん ま
高橋 満子

1936年(昭和11年)
千葉県市川市生まれ
小岩在住



働きながら技術を身につけました

あたし昭和11年(1936年)に市川で生まれたみたい。うちは両親とも眼が悪くて、でも父親は片目だけは晴眼だったの。片目しか見えなくても不自由がないから、新聞だって読めるし、家の事も父がやったの。あたしは6人きょうだいで、兄3人、姉、私と妹。そのうち3人は眼が悪いの。

昭和18年(1943年)に小岩に引っ越してきたみたい。18歳離れた一番上の兄は晴眼者だったので、あたしの面倒を良くみてくれた。でも、その兄は結核で、妹も生まれてすぐに肺炎で亡くなった。世の中、食べる物、着る物、履く物、燃料もない時代だった。我が家も貧乏だった。

近所の子たちと縄跳びやゴム跳びをして遊んだ。仲間は、あたしの眼が悪いのを知っているの、ゴム紐に白い布をつけて高さがわかるようにしてくれた。

近所の子が小学校に通うころ、あたしは飯田橋にあった盲人技術学校(現:都立文京盲学校)の寄宿舎に入った。盲学校に来る人は年齢もバラバラ。戦争が激しくなり学校は閉鎖。結局1年くらいしか行かなかった。習ったのは点字くらい。家に戻り庭に掘った防空壕に逃げ込んだこともある。昭和20年(1945年)8月15日終戦。親たちは泣いていた。あの日は静かでいいお天気の日だった。兄と姉は成田(千葉県)でマッサージの仕事をしていた。あたしは学校に行かないで姉さんの子ども2人の子守り。

昭和26年(1951年)、15歳のころ、箱根で「按摩マッサージ紹介所」に住み込んで働きながら、沼津の盲学校に通った。視力が0.04だったので歩くには不自由しなかったの。箱根から沼津まで1時間半くらいかかった。身体も細く体力もないので体を壊し、実家に戻り休養し、また箱根に戻るといことを何度も繰り返したの。家が貧乏だから、あたしも働かないと食べていけないの。両親にお金の心配をかけたことがない。仕事を始めたころ「あんた、もったいないわね、器量がいいのに眼が悪くて」と女性のお客さんによく言われた。それは嫌だったわね。眼が悪いのはどうしようもないし。

仲間から、東京の大久保(新宿区)に「ヘレン・ケラー学院」という、あん摩マッサージの養成所があることを教えてもらって一時通ったけど仕事と養成所の両立は大変

なのですぐやめた。当時は、学校で学ぶより、実際に仕事をしながら技術を身につけるといのが多かったわね。床屋さんなどもそうだったと思うの。親方のところに住み込んで技術を身につけて一人前になるなどね。それから東京都の「あん摩マッサージ」の検定試験に受かったの。

お嫁にいきました

昭和34年(1959年)、23歳の時に向島(墨田区)で働き始めた。曳舟(墨田区)に「按摩マッサージ紹介所」があり、あん摩職人が16人いた。眼が悪いのは、あたしとう一人だけ。あとは晴眼者。紹介所から向島の花柳街の芸者置屋、料亭、旅館に派遣されるの。

最初のころは紹介所に住んで働いたけど、他の人が夜中じゅう仕事で出入りするの、眠れなくてさ、それで通いにしたの。向島は夜キラキラしてて、昼間は眠っている場所だから。あたしは朝10時には紹介所に入り、夜は最終電車で帰って来たの。時間が空いている時(待機時間)に紹介所の近くの銭湯に行ったりしていた。

向島のお客さんは、ほとんどが社用族で炭鉱関係の人が多かったわね。それも役職のある人。向島は平社員が来られる場所ではないから。お客さんのところに行く時は白い制服を着ていくの。あん摩の仕事は重労働。男の人は80kgくらいの人いっぱいいるからね。それを1時間20分揉む。だから指が変形しちゃって。あたし、指名も多かったのよ。賃金は歩合制だけど、チップだけで自分の小遣いは足りたわね。昭和39年(1964年)、東京オリンピックを控えて、景気のいい時代だったわ。

あたし一度、嫁に行ったよ。向島の芸者屋のおばさんに「あんた一回は人に添ってみるよ」って言われたの。「そうか」と思い、あまり考えずに平井にある相手のところに行ってしまったんだよ。27、8歳のころかな。あたしより一回り上のペンキ職人で2人使っていた。酒飲みで、味噌汁が甘いだの塩っぱいだの、朝から風呂沸かせだの、結構うるさかったの。でも、悪い人ではなかった。ペンキ職人だから「汗かいた」「汚れた」といって洗濯物いっぱい出すのよ。当時の洗濯機の脱水はローラーを手で回して絞るの。あたし、意外と家事はちゃんとやるほうだったのよ。魚

も焼くし、味噌汁、煮物、形はきれいにできないけど天ぷらだって揚げたのよ。布団だって干したよ。お義母さんも一週間くらい泊まっていたことがあり、お礼を言われた。

あたしは籍を入れるつもりはなかったの。そのせいか、相手は「いなくなるしないでよ」「帰らないでくれよ」とよく言っていた。あたしの父にもよくしてくれたし、仕送りもしてくれた。平井では亭主の稼ぎでちょっと豊かに暮らしていた。10年くらいいたのかな。肝硬変で51歳で亡くなった。故郷の北海道までお骨を届けに行った。それで終わり。

家を建てました

実家に戻り、両親の面倒をみながら、また向島で働きだしたの。父親の知り合いの大工の棟梁が「カネ貯めているうちに家を建てちゃいな、物価も上がってくるから」と言ってくれた。

それで昭和53年(1978年)に家を建てた。それまでの家は二間しかなくボロボロで雨漏りもしていた。建築費の半分くらいは貯めていたけど、残りの半分は、棟梁の息子さんに毎月分割で払った。だから、すごく苦労したというか、頑張ったね。

明治生まれの父が昭和56年(1981年)に81歳で亡くなり、2年後に母も亡くなった。父は酒が好きで、母は煙草たばこが好きだった。二人には好きなようにさせてあげた。

両親が亡くなってから、ここで一人暮らし。52、3歳ごろから、なんか視力がないなあと思って医者に行ったら緑内障だと言われた。それでもまだ働けるからよかったなあと思って。だから運がいいなあと思った。

それから、八幡(千葉県)のサウナで仕事をした。サウナでは治療時間が短いし、お風呂は入れるし、ご飯は食べさせてくれるし、車での送迎もあるし、有難いね。あたし、市川や行徳に個人のお得意さんもいたのよ。サウナに来る旦那さんの紹介で、その人の奥様のマッサージにお宅に伺うの。



◆江視協文化祭に出品した花

今、のん気に暮らしています

緑内障が進み60歳のころには仕事もやめた。全く見えなくなって一人で外に出るのが怖くなった。それで、盲人会(現:NPO法人江戸川区視覚障害者福祉協会=略称:江視協)に入った。江視協にはいろいろなクラブがあって、あたしはガイドさんと一緒にリズム運動、カラオケ、花などをやっている。江視協の30周年記念で沖縄に行ったときに、初めて飛行機に乗った。旅行は楽しいね。沖縄では粘土でシーサーを作った。見本を触りながら作ったのよ。記念に家の玄関に置いてあるよ。

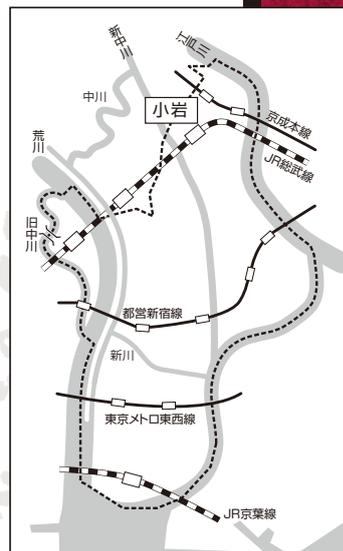
介護保険を利用して週3日デイサービスにも行っている。特に魅力なのは食事とお風呂だね。食事はおいしいし。デイサービスのみんなも、あたしの眼が悪いのを知っているけど特別扱いしないで良い加減にほっといてくれる。体操したりゲームをしたりして、ちゃんとできなくても気にしない。運動の一つと思っている。



◆見本を触りながら作ったシーサー

今でも、自分でできることは何でもしますよ。台所の洗い物もするし洗濯もします。見えないからといって汚していると思われるのは嫌だからね。料理も煮物くらいは作りますよ。見えなくても音やにおいで分かるからね。できないのは、読んだり書いたりすること。何でも人にやってもらうのが当たり前になっちゃったら、自分でやろうという気がなくなっちゃうもの。晴眼者と同じことはできないけど、やらなくちゃしょうがない。やらざるを得ない、生きていくにはね。テーブルの上の瓶に留めである輪ゴムは、袋を閉じる時や洗い物をする時に袖を止めたりするの。ピタッとしていないと嫌なのよ。着ている物も汚れていると言われるのが嫌だから。恥かかされるのは嫌だからね。

昔に比べたら、今は食べたい物を食べ、着たい物を着られる。のん気に暮らしているのも自分の家があるから。それもずっと働いてきたから。あたしは仕事にも恵まれたと思う。自分で言うのもおかしいけど、自分の努力で生きてきたからね。



◆インタビュー/2020年8月
2020年9月
◆聞き手/山本國子、岡西和子、小宮和枝
◆コーディネーター/樋口政則

◆お問い合わせ◆
総務部総務課
人権啓発係
☎6638-8089